

絵本を活用して「ことばの力」を育む —地域日本語教室「わせだの森」における実践を通して—

中川 智子・尾関 史

【キーワード】 絵本・ことばの力・地域日本語教室・対話

1 はじめに

世界のグローバル化に伴い、日本にも多様な言語文化背景を持つ子ども達が増えてきている。このような子ども達は言葉や文化の壁にぶつかりながらも、一日の大半を学校の中で過ごしている。そのため、日本語を母語としない子どもの日本語支援は学校の文脈で語られることが多い。早稲田大学周辺の小学校でも日本語を母語としない子どもたちのための日本語指導が行われており、子どものことばの力を育てる教育が展開されている。しかし、子どもの教育は学校だけが担うものではなく、子どもが生活する家庭や地域も大きな役割を果たしていることは確かである。そこで、筆者らは学校という文脈を離れた「地域」に注目し、子どもたちが学校の文脈とは違う言葉に触れ、また異年齢の子どもたちが学校外で触れ合える機会として地域日本語教室「わせだの森」をデザインできないかと考えた。子どもたちに向けた教室をデザインするにあたり、筆者らは「絵本」に注目した。筆者の一人である中川は、学校図書館に勤務し子ども達の読書教育に関った経験がある。その経験の中で感じたのは、多くの子ども達が絵本に興味を持っているということである。近年、学校において読み聞かせ等の多様な読書活動が展開されている。絵本を目の前にすると、子ども達は絵本の世界に吸い込まれていく。絵本を通して子ども同士、子どもと支援者が関わり合い、感じたことや疑問に思ったことを話したり書いたりしながら言語に親しむことができることは、多くの子どもや大人たちが経験してきていることである。そこで、本研究ではこのように子どもたちのことばの発達にとって多くの可能性を持っている「絵本」を活用した日本語支援について、地域の日本語教室の実践から探っていきたいと思う。

2 先行研究 —絵本の持つ可能性—

そもそも、絵本は子ども達の学びにとって、どのような可能性を持っているのだろうか。本章では絵本の持つ可能性について考えてみたい。

松居(1990)は絵本が人と人とを結ぶ性質を持ち、子どもと大人を結びつける橋渡しの役割を担っていることを指摘し、これを絵本の持つ「コミュニケーション性」と

して注目している。コミュニケーションやインターアクションの機会が得られるという点で、絵本の持つコミュニケーション性は子どもに対する日本語教育にとって必要な特性であると考えられる。また、秋田(1998)では、子ども達が絵本を読み、読んだことを物語る事が子どもの自己形成につながっていることを述べ、子ども達は絵本を読むことで自分と他者、そして自分を取り巻く世界との関係を創り出しているという。つまり、子どもの自己形成や周囲との関係作りにとっても絵本が重要な役割を果たしていることが分かる。さらに、このような子どもにとって多くの可能性を持った絵本を活用していくために、それぞれの子どもの発達やおかれている環境を踏まえた「読書環境デザイン」の必要性を述べている。支援者はこの環境をどのようにデザインし、そしてどのように関っていくのか、そして子どもの発達を踏まえ、子どもとともに環境を作っていくことが重要であるという。このような考えは、秋田(2005)の「読書コミュニティのデザイン原理」にも示されている。大人と子どもと一緒に読書を巡る活動をし、本の独自性を大切にしながら、継続的に学び手として参加することの大切さが示されている。

一方で、近年増加する JSL の子ども達は、「ことばの力」の不十分さから学習場面に参加していくことの難しさを感じていることが多い。このような JSL の子どもに対し、国府田(2004)では絵本を活用して「読み書き能力」を育成する日本語支援を提案している。そして、視覚的な表現や物語性といった絵本の持つ特性が JSL の子どもたちの認知的な能力の発達にも効果的に働くことを指摘している。このような事例から、JSL の子どもに対して、絵本を活用して本を読む経験を与えたり、他者と関わり合いながら読書を巡る活動に参加する機会を与えることで、様々な経験や体験をするきっかけが生まれ、それが結果的に子どもたちのことばの力の育成につながると考えられる。このような考えのもと、本稿では JSL の子ども達の「ことばの力」を育むための支援として、絵本を使った日本語支援の可能性を探ることを目的とする。筆者らが実際に行った地域の日本語教室¹（「わせだの森」）を通し、絵本を活用してどのような活動のデザインが可能なのか、また子ども達がそこでどのような「ことばの力」を育んでいったのかを考察する。

3 実践「わせだの森」の概要

3-1 「わせだの森」の地域日本語教室作り

06年度秋学期の実践「わせだの森」は2006年11月～2007年1月の3ヶ月間、早稲田大学の教室を開放して行われた地域の日本語教室である。学習者は近隣の地域の人々から公募した。なお、秋学期は大人グループと子どもグループの2グループで展開し、筆者らは子どもグループを担当した。地域での絵本を使った取り組みにおいて読み聞かせを行うものは多いが、この「わせだの森」では JSL の子ども達に対して、読み聞かせを行うと

もに、「ことばの力」を育てることにも着目しながら言語活動をデザインした。子どもグループでは、子ども達が絵本を使った活動に参加し、その中で考えたり、考えたことを他者に伝えたりすることを体験する中で、その体験が自身のことばとして身につけていくことを期待して、活動のデザインを行った。

3-2 対象

子どもグループでは、地域に住む子ども達を対象とし、JSLの子ども達と日本語母語話者の子どもたちの区別を設けず募集を行った。これは、JSLの子どもと日本語母語話者の子どもとの自然なインターアクションの機会を設けたいという思いがあったためである。このような募集活動を経て実際に「わせだの森」に参加したのは、公立小学校に通う韓国語を母語とする1年生の女子児童（以下A）、日本語を母語とする2年生の女子児童（以下B）、その弟である幼稚園児（以下C）の延べ三名であった。

3-3 実践の概要

実践は、2006年11月11日～2007年1月27日（土）（12月23日～1月6日の冬休み期間を除く）の全9回の土曜日に計画され、実際には子どもの参加があった以下の4回に活動が実施できた。なお、子どもが集まらなかった回は活動案の検討をおこなった。以下に実践の概要をまとめた。

	実践日	活動内容
第1回	11月18日	実践1：絵本「ねえ、どれがいい？」
第2回	11月25日	実践2：絵本「たんじょうびの ふしぎな てがみ」
第3回	1月13日	実践3：絵本「きょうはなんのひ？」①
第4回	1月27日	実践4：絵本「きょうはなんのひ？」②

4 絵本を使った活動の可能性

本章では、「わせだの森」で筆者らが行った「ことばの力」を育むための活動のデザインがどのようなものであったのか、また、子ども達はその活動を通してどのような「ことばの力」を身につけていったのかを明らかにする。

4-1 「ことばの力」を育むためのデザイン

4-1-1 それぞれの実践で目指したもの

筆者らは、この「わせだの森」の実践を行うにあたり、子どもたちにどのような「ことばの力」を身につけてほしいのかを常に自問自答してきた。また、それは子どもと実際に触れ合う中で、ダイナミックに変容を遂げていった。以下ではそれぞれの活動案の実例を挙げながらそのようなデザインの変遷を辿る。なお、それぞれの活動の詳細な活動案は本文の後に資料として添付したので、そちらを参照されたい。

まず、それぞれの活動で筆者らが子どもたちに身につけて欲しいと思った力はどの

ようなものだったのか。全4回の実践で目指していたことをまとめたのが以下の表である。

実践	活動目標	目指したこと
第1回	① みんなと仲良くなる。 ② 絵本の読み聞かせに参加しながら自分の意見をいう。 ③ 究極の選択を作ってみる。 ④ 今日したことを捉えなおす。「切り株づくり」 ²⁾	・ 絵本に親しむ ・ ことばを使ってやり取りする
第2回	① 日本語の絵本に親しむ。 ② 絵手紙の暗号として示されている記号の意味を想像し、言葉で表してみる。 ③ 自分でも絵手紙を書いてみる。 ④ 今日したことを捉えなおす。「切り株づくり」	・ 日本語を使って、自分を表現してみる
第3回 第4回	① 日本語の絵本に親しむことができる。 ② 声に出して読み、日本語のいろいろな表現に親しむ。 ③ 手紙のやりとりを楽しむことができる。 ④ 今日したことを捉えなおす。「切り株づくり」	・ 読みを深める ・ 読みを広げる ・ 相手を意識した読みをする ・ 誰かに発信する

第1回目の実践では、初めて絵本に触れるかもしれない子どもたちに向けて、まずは絵本というものに親しみを持ってもらうこと、そして子どもの日本語の力や興味関心を見極めて、次の活動のデザインにつなげていくことを心がけた。選んだのは『ねえ、どれがいい?』（ジョン・バーニンガム作・まつかわまゆみ訳 評論社 1983）という読者に対する質問形式で進んでいく対話式の絵本である。「へびにまかれるのと、魚にのまれるのと、ワニに食べられるのと、サイにつぶされるのと。ねえ、どれがいい?」絵本の中には究極の選択が次から次へと登場する。「どれがいい?」→「これがいい」→「どうして それがいい?」→「〇〇だから、これがいい」と、読み手と子どもとがやり取りを行う中で、子どもたちの価値観と想像力が存分に発揮されると考えた。そして、子どもたちがそれぞれ違う価値観を持っていることを知り、それを認め合ったり、「どうして?」と思ったりすることで友達との関わりを通して絵本を楽しんで欲しいという願いをこめて活動をデザインした。また、本実践で目指していたのは、「子ども個人と絵本との対話」であり、子どもが絵本の世界に興味を持ち、想像力を持って読み進めていくための活動をデザインした。

続く第2回では、参加した子どもの日本語の力、興味関心などを踏まえ、活動型の実践をデザインした。子どもが、簡単なやり取りが出来る程度の日本語の力を持っていること、絵や文字を書くことに興味を持っていることから、『たんじょうびのふしぎなてがみ』（エリック＝カール作/絵 偕成社 1978）という絵本を選んだ。主人公の男の子が★や▲、●などのおかしな記号がたくさん含まれた手紙を受け取り、暗号の

ようなしるしの意味を一つ一つ謎解きしながら、プレゼントにたどり着くというお話で、子ども達が様々な思考をめぐらせながら読むことが出来る。実践では、この暗号の手紙を解読する活動とともに、実際に自分でも暗号の手紙を書いてみるという活動を取り入れ、子どもが絵本を通じて自分自身の考えや思いをことばで表現してやることを目標とした。これは、第1回の「子どもと絵本の対話」に対して、絵本の読みを踏まえた「子ども個人での個人内での対話」を重視したデザインでもある。

第3回、第4回は連続した活動として行った。本実践では、それまでの「個人と絵本」「個人内」という読みを踏まえ、「他者を意識した読み」を目指した。具体的には、自分の読んだことを、「ことば」を通して表現し、他者に伝えてみるという活動をデザインした。使用したのは『きょうはなんのひ?』（瀬田貞二作・林明子絵 福音館書店1979）という絵本である。お父さんとお母さんに素適なプレゼントを贈るために、主人公の女の子が何通もの手紙を書いて、仕掛けていくというお話であり、子どもは絵本の中のお母さんと、思わず一緒に手紙を探してしまう。読んでいくうちに、自分も手紙が書きたくなってしまふような内容である。それならば実際にこれを自分達でもやってみたらどうだろうと考え、第4回目の実践では、絵本と同じように手紙を作り、手紙探しの活動を計画した。また、これまで1回の実践で一冊ずつの絵本を取り上げてきたが、この4回目の実践では子ども達に物語をじっくり味わい、自分なりに捉え直して欲しかったため、同じ絵本を用いてより深く、広がりのある読みの活動を目指した。そして、自分の読んだことを「他者に発信」することを目指した。この思いは、手紙探しの活動を、実際に子どもの父親や周囲の大人たちを巻き込んで展開するという実践に結びついている。以上をまとめると、それぞれの実践で目指されていた「ことばの力」は、「絵本と子どもとの対話」から「子ども自身の個人内での対話」、そして「他者を意識した対話の発信」へと変容を遂げていったことが分かる。

4-1-2 自己表現のための仕掛け—「切り株づくり」—

このような実践のデザインの変化に加え、筆者らはこの実践を通じて「切り株づくり」という活動を初回から最終回に至るまで行っていた。これは、模造紙に画用紙で作った切り株を貼り、一人の子どもに対し一本の木の切り株を与え、そこに毎回の活動での感想や自分の思ったことを書いた葉っぱを自由に貼り付けていくというものである。木の枝や葉の数は自由に増やしたり、広げたりすることができ、子ども自身で自由にデザインできる木を目指した。この切り株を作成することで、筆者らは子どもが自分自身で主体的に読みの活動を行い、読んだことを自由に振り返り、表現する場を与えたいと考えた。そして、横に並ぶほかの子どもたちの切り株を見ながら、刺激を受け、自然なやり取りが生まれると考え、活動を行った。

このように、筆者らが行った活動デザインは、目の前にいる子どもたちのことばの力や子どもの背景、そして子どもの発達の段階を踏まえて行われた。そして、その活動を通し

て子どもにどのような力を育んでいきたいのかを、実践を通して絶えず問い続けた。次節 4-2 ではこのようなデザインの中で、子どもたちにどのような「ことばの力」が育まれたのかについて見ていきたい。

4-2 実践を通し育まれた「ことばの力」

4-2-1 実践を通してみられた「ことばの力」

全4回、子ども達に対して絵本を使い言語活動を展開した。国府田(2004)は「絵本」の効果として「対話」の促進をあげている。筆者らもこの国府田の「対話」に注目し、それぞれの活動をデザインするにあたり、相手を意識し他者との自然なコミュニケーションの中で言葉を使うことができるような活動を心がけた。その結果、実践を通し、子どもと支援者、子ども同士、また子どもと絵本など多様な「対話」が生まれた。

実践1「ねえ、どれがいい？」の実践では、やりとりを通して子どもが他者の価値観に触れることができる絵本を扱い、子どもの興味や関心から多様な対話がうまれる様子が見られた。以下の事例①は、絵本の読み聞かせが終わった後、絵本の内容を踏まえて子どもが自由に自分なりの「ねえ、どれがいい？」を考え出し、支援者に問いかけている場面である。絵本の読みを踏まえた子どもと読み手との自然な対話の様子が見てとれる。

【事例①】「ねえ、どれがいい？」

Aさん：ライオンとあそぶ、いぬとおにごこをやて ねことたたかい、ジャングルジムであそぶ、どれがいい？



支援者：ライオンとあそぶがいいなあ。Aさんは？

Aさん：いぬとねことたたかい。

支援者：どうして？

Aさん：いぬとねこがすき。

(2006/11/18 授業観察記録より)

また、実践2「たんじょうびのふしぎなてがみ」では、絵本に登場した暗号の手紙を、実際に自分でも書いてみるという活動をデザインすることで、他者に自分の考えや意図を伝える練習の機会となった。このとき、Aさんは暗号が難しくなるように道筋を複雑にすることにこだわり、「 (アーチ) をくぐってください。そしてさいごに  (アーチ) にのぼっておいてください。」と、分からない言葉を支援者に尋ねながら、読み手を意識した手紙を作成していった。

さらに、実践3の「きょうはなんのひ？」においては、対象となる子どもは異なっていたが、実践2と同じく手紙を書く活動を行った。絵本のストーリーの中で展開される手紙探しを同じようにやってみようという活動において、子どもたちの希望により

「手紙探しに参加してほしい」と大人の学習者に依頼しに行く場面から、手紙づくり、プレゼントづくりまで子ども達が中心となって活動をし、様々な場面で多様な言語活動が展開された。どの活動においても子ども達は楽しそうに、意欲を持って学習に参加し、ワークシートを活用しながら、自分のことばで考えたことを書いて表現したり、相手に伝えたりすることができた。事例②には、そのような、子どもたちの「読み」から広がる参加の様子が見て取れる。

【事例②】「きょうはなんのひ？」

くてがみをかこう！（ワークシートの記述より）>

だれにてがみをかきますか？ 【むこうのお姉さん】

プレゼントはなんにしますか？【おり紙入り絵】

くてがみの下書き（ワークシートの記述より）>

① おいしくて とうめいの中についてるよ！

（「水のペットボトル」を示そうとして（以下同様））

ヒント. 人はこれがなかったら生きていけない！

② ふざけているやつ（男）のいすの上！

（「弟のいすの上」）

③ 紙クレープの中！

（「紙で作ったクレープ型の袋の中」）

④ 黄色のデブのふくの中

（「くまのプーさんのぬいぐるみのふくの中」）

⑤ 四角のピンクのはこの中にある！

（「ピンクの空き箱の中」）

（2007/01/27 活動においてBさんの書いたワークシートより）

手紙に書く「水のペットボトル」を表現するために、なかなかいい言葉が思いつかずに困っているBさんであったが、しばらくして絵本の中に出てきた手紙の中に【ヒント】として補足している場面があったことを思い出し、「ヒントとして書き加えればいいんじゃない？」と声を上げ、「人はこれがなかったら生きていけない！」というヒントを書き加え、手紙として完成させることができた。

4-2-2 実践を通して広がる「ことばの力」

これら4回の実践を振り返る中で、対象となった子どもは異なっていたものの、デザインの変容に伴って、子ども達の「ことばの力」の表れ方に広がりが見られることが分かった。4-2-1の事例に即して見てみると、実践1では支援者と子どもとのやりとりだけだったものが、実践2では相手を意識しながら自分自身の考えを言葉で表現し伝えようとする活動へと広がっていった。そして、実践3・4においては、子ども達が、自ら手紙の下書きの段階で水を「おいしい」とか「人はこれがないと生きていけない」という表現で表したり、プーさんのぬいぐるみを「黄色のデブ」等の言葉に言い換えたりするなど、相手が少し考えなければならないような言葉を選んだり、

手紙の探す順番をシミュレーションしたりしながら、より相手を楽しめるような手紙作り活動への展開が見られた。このような点で、絵本の読みや周囲の人との様々なやりとりを通して、子どもたちのことばの表現の広がりが見られたといえる。さらに、ワークシートの活用、インストラクションの提示など、子どもの個々の性格や言葉の力を見極めながら活動をデザインすることで、子どもの意欲の持続にもつながっていった。今回の絵本による日本語支援は、参加した子ども達の「興味関心」にあった活動をデザインするために細かい修正を何度も行っている。同じ手紙を使った活動でも、暗号文を自分で作ってみるというような個人内での対話を楽しむもの、他者への働きかけを組み込んで他の人との対話に挑戦するものなど、デザインを広げていくことで子どもの対話にも広がりが見られ、さらに相手を意識したことでことばを使った表現にも広がりが見られた。

なお、これらのことばの広がりに加え、子どもの学習において「興味を持つことができ、意欲が持続する」ことは、学びが積み上がっていくという点において大切な要素である。毎回の新しい活動に加えて、実践を通して継続的に行った「切り株づくり」も子どもにとって楽しみの1つだったようである。他の子が書いたものに刺激を受けて切り株作りをする様子もみられ、回を重ねるごとに自己紹介や活動に関する感想などが増え、賑やかな切り株を完成させることができた。自己表現を広げる活動としてこの切り株づくりも一役買ったと言えるだろう。

5 おわりに

今回の実践では、地域日本語教室という場において絵本を活用して子どもたちにどのような「ことばの力」を育むための支援ができるか、その可能性を探るものであった。今回実践を行った地域の日本語教室という場は子ども達にとっては「気軽に来ることができる」という利点はあるものの、裏を返せば「自由に欠席できる」教室でもある。そのため、同じ子どもが継続的に参加することが難しく、継続的な学習活動のデザインが困難であったこと、また、学びが積み上がっていかないなどのジレンマも常にあった。さらに、今回は本稿の直接の目的であるJSLの子どもたちの学びを継続的に見ることが出来なかった。しかし、これらの困難にもかかわらず、子どもにとって必要なことばの力を常に考える中で学習活動がデザインできたこと、また、そのデザインを通して子どもに様々なことばの力を育む可能性を見ることが出来たことは今回の実践の成果であったといえる。今後は、身につけたことばの力がより一層深みと広がりを持っていくような継続的な活動のデザインが出来る場の確保と共に、今回実現できなかった多人数での実践を展開していきたいと考えている。個人で読んだことを他の子どもたちと共有したり、紹介したりすることで、自分自身の読みの深まりと広がりにつながっていくことが予想されるためである。今後の課題としたい。今後も

絵本を活用した支援を通して、子ども達と共に楽しく言語活動を展開していきたいと考えている。

【注】

- 1 本研究において、筆者らはこの「わせだの森」の教室を、いわゆる学校などの正規の教育機関とは異なる場で行われていること、参加が自由に開かれているなどの点で地域の日本語教室として位置づけた。
- 2 「切り株づくり」とは、画用紙で作成した切り株に毎回の活動での感想や自分の思ったことを子ども達が自由に書き加えていくという活動である。なお、この「切り株づくり」の活動の詳細は4-1-2に述べられているので、そちらを参照されたい。

【参考文献】

- 秋田喜代美(1998)『読書の発達心理学—子どもの発達と読書環境』 国土社
- 秋田喜代美(2005)『読書コミュニティのデザイン原理 本を通して世界と出会う—中高生からの読書コミュニティづくり』 北大路書房 pp.34-44
- 秋田喜代美・黒木秀子(2006)『本を通して絆をつむぐ—児童期の暮らしを創る読書環境—』 北大路書房
- 川上郁雄・石井恵理子・池上摩希子・齋藤ひろみ・野山広 (2004)「年少者日本語教育学の構築に向けて—『日本語教育が必要な子どもたち』を問い直す—」『2004年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会 pp.273-284
- 国府田晶子(2004)「絵本と対話による「読み書き能力」の育成—JSL教育を必要とする定住型児童を対象に—」『早稲田大学日本語研究』5 pp.61-75
- 松居直(1990)『絵本・物語るよろこび』福武書店

【参考資料：活動案】

＜実践1：絵本「ねえ、どれがいい？」＞ 日時：2006年11月18日（土）13：30～15：00
 使用絵本：『ねえ、どれがいい？』ジョン・バーニンガム作・まつかわまゆみ訳 評論社(1983)
 本時の目標：①みんなと仲良くなる ②絵本の読み聞かせに参加しながら自分の意見をいう ③究極の選択を作ってみる ④今日したことを捉えなおす（「切り株づくり」）
 参加児童：小学1年生（女）母語は韓国語

段階	時間	活動
はじめに	20分	・教室での過ごし方 ・名札作り ・自己紹介(名前、学校、何年生、など) お互いのことを知ろう。
導入	10分	・題名からどんな内容かを想像する。 ・「ねえ、どれがいい？」意味の確認をする。
読み聞かせ	20分	・絵を見せながら読む。 ・わかりにくい言葉はその都度一緒に考えたり説明したりする。 ・究極の選択を試してみる。 ・自分の意見(理由)を話す。
言語活動	10分	究極の選択をつくって発表する。(絵で表現する/言葉で表現する) ・友達の発表を聞く。
ふりかえり	10分	・葉っぱに感想を書く。

＜実践2：絵本「たんじょうびのふしぎなてがみ」＞ 日時：2006年11月25日（土）13：30～15：00
 使用絵本：『たんじょうびのふしぎなてがみ』エリック＝カール作/絵 偕成社(1978)
 本時の目標：①日本語の絵本に親しむ ②絵手紙の暗号として示されている記号の意味を想像し、言葉で表して

みる ③自分でも絵手紙を書いてみる ④今日したことを捉えなおす。(「切り株づくり」)
 参加児童：小学1年生(女) 母語は韓国語

はじめに	20分	※新しい仲間がいた場合、再度自己紹介を行う。 ・葉っぱに好きなものなどの自己紹介を自由に書き込み、自分の絵の周りに貼っていく。
導入	5分	・表紙を見ながらどんな話か題名から想像し、内容についての方向付けをする。 ・語彙の確認：たんじょうび、ふしぎ、てがみ、形の語彙(三角、丸、四角・・・)
読み聞かせ	20分	・絵を見せながら読む。 ・記号と絵を一致させながらよむ。 ・わかりにくい言葉はその都度一緒に考えたり説明したりする。
言語活動①	10分	・最後まで読み終わったら、もう一度最初の手紙の部分に戻って、手紙を読み直してみる。ストーリーを追いながら、手紙の意味を確認する。 ・手紙をコピーしてそれぞれの手元にもたせ、手紙の記号がそれぞれ何を意味していたのか、記号の下に書かせる。
言語活動②	10分	・自分でも絵手紙をかいてみる。 →地図(単純な家の地図など)と記号(星、三角、丸、四角、長方形、楕円など)を事前に与え、自由に組み合わせ作文をしてみる。 *より単純化した文章で書けるような指示、ワークシートの作成 *こちらでルートを事前に示し、言葉だけを書きこめるようにする。余裕があれば、自分で自由に手紙を作成してみる。
ふりかえり	10分	・今日作成したシートを切り株に貼り付ける。 ・切り株を自由に装飾する。

<実践3/4：絵本「きょうはなんのひ？」>日時：第1回 2007年1月13日(土) 13:30~15:00
 第2回 2007年1月27日(土) 13:30~15:00

使用絵本：『きょうはなんのひ?』瀬田貞二作・林明子絵 福音館書店(1979)

本時の目標：①日本語の絵本に親しむことができる ②声に出して読み、日本語のいろいろな表現に親しむ
 ③手紙のやりとりを楽しむことができる ④今日したことを捉えなおす。(「切り株づくり」)

参加児童：小学2年生(女) 幼稚園生(男) 母語は日本語

第1回	はじめに	15分	自己紹介を行う。(名前、学校、学年、など)
	導入	5分	・表紙を見ながらどんな話か題名から想像する。 ・いろいろな日(12月25日、1月1日など)を示して「●●は何の日ですか?」でやりとりをする。
	読み聞かせ	20分	・絵を見せながら読む。 ・わかりにくい言葉はその都度一緒に考えたり説明したりする。 ・手紙の部分にポストイットを貼っておき、手紙部分を音読する。 ・手紙を確認しながら物語を追っていけるようにする。
	言語活動①	10分	本の内容と手紙の部分を一致させていく。 簡単なクイズを解きながら、語彙や内容を確認する。
	言語活動②	10分	再話する。子ども自身のことばで絵本の内容を語る。
	ふりかえり	10分	葉っぱに感想を書いて切り株に貼る

第2回	導入	5分	・どんな話だったかを思い出す。 ・絵本を見ながら大まかな内容を一緒に確認していく。
	言語活動①	20分	・絵を見せながら、もし自分だったらどこに手紙をかくすかを考える ・ワークシートに手紙の下書きをする。
	言語活動②	30分	・ゲームの準備 ・2号館1~3階の探検(かくし場所を探しに行く。) ・5カ所かくし場所を見つけて、かくし場所を示す手紙を書く。 ・プレゼントづくり ・手紙とプレゼントをかくしに行く。 ・プレゼント探し 周囲の大人に実際に手紙を読んでプレゼントを探してもらう。
	ふりかえり	5分	・簡単な感想を葉っぱに書く。切り株を自由に飾る。

(ナカガワ トモコ・修士課程1年)

(オゼキ フミ・博士課程1年)